

第2章 太子町

太子町の地形は、金剛山地の西側緩斜面と、そこから派生する丘陵地、およびそれらが侵食されてできた台地を中心としています。

おもに、斜面を侵食している河川は、石川の支流の飛鳥川と太井川と考えられます。

それらの河川の支流もまた、小さな谷を形成するため、丘陵・台地・谷が複雑に入り混じる地形となっています。

町の西端部、梅川の流域には、低地や河岸段丘とみられる地形がわずかながら確認できます。

太子町の山側は、二上山地で、二上山は縄文時代から弥生時代にかけて、石器の材料となるサヌカイトを産出する山として有名です。

産出する範囲は、二上山北西の穴虫峠より西側、春日山付近や二上山より北にやや離れた、奈良県香芝市の関谷周辺が主に想定されており、春日山付近の産出範囲には、太子町の一部が含まれます。

今回取り上げる遺跡では、ミヤケ北遺跡が梅川右岸の段丘上に位置し、太子町では数少ない平野部の立地であるほかは、尼ヶ谷古墳と植田遺跡は、山地から西に延びる、丘陵や台地上に位置します。

町内でみられる遺跡の多くは古墳で、敏達天皇陵・用明天皇陵・推古天皇陵・孝徳天皇陵と、聖徳太子墓に代表される六世紀末から七世紀の王陵や、二子塚古墳、仏陀寺古墳、松井塚古墳など、古墳時代終末期の古墳がまとまって分布する重要な地域です。